

登山・登攀の記録

北アルプス 剣岳東大谷中尾根

日時:2006年11月23日~27日

メンバー:CL 伊藤達夫(コーチ)、渡辺志保、中島諒

概要: 東大谷中尾根を末端から獅子頭までトレース。時間切れのため、本峰へは行かずに早月尾根を下降した。

記録

11月23日 曇り ガスのため視界が悪い
起床(7:30)―発(8:15)―東大谷出合手前のテントサイト(15:30)

(6:00)起床で(7:00)発という打ち合わせに反して私と渡辺さんは寝坊をしてしまい、初っ端から伊藤先生に怒鳴られる。ただでさえタイトな計画であるだけに自らの無自覚さに腹が立つ。急いで準備をして出発する。

取水口の辺りで骨組みだけの橋を肝を冷やしながら右岸に渡り、道の名残のような踏みあとを歩く。積雪は薄くかぶる程度。ガス、と言うか霧が出ているため、フリースの手袋がしっとり濡れる。視界も悪い。(10:00)には早月 1900mピークから下ってくる支沢に着く。そこから少しだけ高巻く。さらに1250m付近を左岸に渡り、尾根を100m程登ってからトラバース気味に斜上し、ざれの斜面をクライムダウンして降り、しばらく歩いて水線に戻る。戻った場所は既に毛勝谷出合のすぐそばのはずだが、ガスのために視界が100mを割っており、地形がわからない。左岸に渡ったのが(11:30)くらいで、偵察の時間を含めて約2時間かかった。

そこからは渡渉ポイントを探しつつ、水線上を行く。(14:15)に渡渉。

毛勝谷出合以降、歩きやすい河原が続く。(15:30)、ずいぶん進んでいるはずだが、相変わらず視界がきかないために地形がわからない。時間と高度計から東大谷出合はすぐそばであると判断し、テントサイトが見つかったため行動を打ち切り、テントを建てた。

11月24日 曇時々晴 午後からはガス 起床(4:30) 東大谷出合手前のテントサイト(6:30)―東大谷出合(7:06)―舌滝下(8:45)―二俣のテン

トサイト(中尾根取り付き)(16:00)―2ピッチFIX完了(17:20)

出発後しばらくして東大谷出合に到着する。聞いていた話ではほとんど水がないとのことだったが、かなりの水量がある。

東大谷に入ればとすると、ちょっとしたギャップが現れた。ここでアイゼンをつけ、先ず私が空身で登り、3人のザックを引き上げ、さらにスリングをたらしてあとの二人を確保して通過した。このギャップを越えるとすぐに舌滝が現れる。手前で左岸に渡り、伊藤先生リードで2ピッチFIXして巻いた。所々残置ハーケンがある。1ピッチ目30m。2ピッチ目50mはほとんどトラバースで、途中で見えた滝の上部はほんとに「舌」のような形をしていた。

ザイルのシステムについて、今回全行程全てのピッチで伊藤先生がリードを行い、私が確保。FIXして渡辺さんがユマーリングで登り、最後に私がフォローで登る、というシステムで登った。

舌滝を越えるといきなり雪渓が現れてびびった。しかもかなり状態が悪い。到底越えられそうにないので右岸のルンゼを途中まで詰めてからトラバースに入る。1,2ピッチ目は完全にトラバース。ザイルを伸ばせるだけ伸ばす。途中藪から岩に変わる。2ピッチ目の終了点に伊藤先生がリングボルトを打っていた。3ピッチ目はトラバースのあとトップは途中の支点にザックを残置して直上。ここでも伊藤先生が終了点に二本目のリングボルトを打つ。

渡辺さんは直上ラインにかなり苦勞したが何とか突破。フォローの私は一度登った後ローダウンし、残置されたザックを担いで登り返す。

4ピッチ目は少し傾斜の落ちた斜面を斜上。意

登山・登攀の記録

外にいやらしい。2ピン目のアングルを回収するのに苦勞する。軟鉄の残置ハーケンがあったので、以前にも誰かしらこのルートを通っただけなのがわかる。このピッチの終了点にもリングボルトを使用。

さらにここからこの一本のリングボルトで約 30メートルの懸垂を行い、崩壊して安定した雪渓に降り立つ。バックアップのハーケンに荷重がかからぬよう二人目までが降り、最後がハーケンを回収して降りる。当然の如く、最後に降りるのは私だ。

私は文登研や雑誌で言われるほどリングボルトを憎んでいる訳ではないが、信用している訳でもない。一度抜けられているせいもある。まあ、多かれ少なかれそれは全ての支点に対して言えることだが。前述の手法で強度が十分であることはわかっているし、設置者は恐らく日本でトップクラスの熟練者だ。それでもその一点が切れたら死ぬ、と言う状況はなんとも言いがたく恐ろしい。

今回の場合、内にある諸々の懸念を押し込め、私にその一点に命をかけたのは設置者への信頼だ。自分の判断ではない。自分自身への信頼で命を掛けることができるまで、私にはあとどれだけの時間と経験が必要だろう？まして他人の命なら？

私などまだアルパインクライミングという世界の入り口の受付に並んだくらいのもので、このまま並び続ける自信が少しだけ、揺らいだ。

雪渓に下りると二番目に降りたはずの渡辺さんがいない。行ってしまったようだ。懸垂は当然ダブルで行っているから、ザイルは2本回収される。2本とももってこいってか？！と少し慥然としていると、空身で戻ってきてくれた。よかった。

崩壊してデブリとなった雪渓を歩いて再び右岸に渡り、しばらく歩くとまたまた怪しい雪渓が現れた。ザイルを出し、伊藤先生トップで少し右岸に巻き、安定した場所で雪渓に移る。そのまま雪渓を左岸に横断し、露岩にリングボルトを打ってビレイ。このとき伊藤先生のバイルのハンマーが壊れる。そこから更に20mほど懸垂を行い、雪渓の下に出る。5つ持ってきたリングボルトは残り一つ。ボルト

が無ければここまでの前進は無かったが、無かったらすんなり敗退できたのに、という弱気な考えが浮かんでくる。しかも運の悪いことに、ここまでのピッチで7枚のハーケンのうち一枚を失っている。全て回収したつもりだが、どこかで見落としたのか、あるいはトップが落としてしまったのか。何れにせよ、単純に考えて、確保始点に2枚ずつ使ったらランニングとして使えるのは2枚になってしまう。不安だ。ここまでザイルを伸ばせるだけ伸ばして進んできたが、アンカーを取れる場所で細かくピッチを切っていくべきかもしれない、と伊藤先生と今後の戦略について話す。

しばらく歩くと左右にほぼ同じ規模の滝が見える。二俣に着いたのだ。この時点で既に 16:00 時。地形図を見る限り、中尾根は取り付きがもっとも急なため、取り付くのは明日になるだろう。テントサイトを求めて下の右俣(仮)に入る。と、すぐそこになんと素敵なテントサイトを発見。平坦で、水が取れて、しかも取り付き直下だ。

整地を渡辺さんに任せ、私と伊藤先生で明日のために FIX 工作を行う。一ピッチ目はテントサイトから一段上がった場所から雪の詰まったルンゼを詰め、約55m。2ピッチ目は藪の斜面から草付のルンゼに入り、少し傾斜の落ちた所までで50m。17:20 時には作業を終え、テントを建てた。

11月25日快晴 大日、弥陀ヶ原、早月、富山平野の展望が良い

テントサイト発(7:00)―1790m ピーク(8:30)―2200m 地点(11:30)―2600mのテントサイト(15:00)

2ピッチの FIX を登ったあと、更に1ピッチ行ってザイルをしまふ。しばらく登るとすぐに傾斜が落ち、稜線に出る。既に 1790m ピークである。幕営適地である。

ここから稜線通しに登り、藪の濃い場所は左右の斜面を歩く。傾斜は結構急で、昨日の疲れもありかなりバテながら歩く。2150m～2200mではいったん傾斜が落ち、その先のルートが良く見える。尾根は南に湾曲しながら一度急にのぼり、ダケカンバの生えた辺りで少し緩んでいるように見える。

登山・登攀の記録

しかし、2350m 付近で急な雪面を登りきり、稜線上に戻ってもダケカンバと岩が混じった尾根はますます細くなり、緩むはずの傾斜は急なままだ。どうしたことか、と考える。傾斜についてはトータルするとどうやら落ちてはいるらしいが、急登の後一瞬平らになり、また急登になり、のくりかえしでとてもしんどい。また、細いリッジに中途半端に乗った雪がとても怖かった。

右手に明瞭になった富高ルンゼを眺めつつ、結局尾根の細さも傾斜のしんどさも 2600mまで変わらなかった。しかし、高度が上がるにつれ、周囲の景色の素晴らしさはしばしそのつらさを紛らわせてくれる。既にせっぴができた大日、奥大日。真っ白な弥陀ヶ原に、鋭く立ち上がる劔御前。早月は横から見ると本当に鋭い岩峰をいくつも突き立て、中でも所謂「三本槍」は信じられないくらい切り立っている。天気がいいことも手伝い、景色を楽しむには絶好だ。

つらくも楽しい雪稜歩きが 2600mまでつづいたが、その先は尾根が斜面に吸収され、いよいよ中尾根の核心部だ。この時点で既に 15:00 時であったため、これ以上は進めないと判断し、傾斜の落ちたリッジ上を丁寧に整地し、幕とする。

11月26日曇時々雪 ガスのために視界悪い
テントサイト発(6:25)―核心部 11ピッチ―獅子頭(13:40)―早月小屋(16:27)

いよいよ中尾根の核心部に入る。獅子頭までの標高差は約300m。しばらくリッジの続きを登るが、すぐに富高ルンゼの向うの細い岩尾根とともに一旦斜面に吸収される。いくつか急な雪壁をのぼり、ザイルを出して登攀を開始する。天気はあまりよくないし、ガスのため視界がきかず、先が見通せない。

最初の 3 ピッチでトラバースのあと不明瞭な稜線にラインをとり、チョンラピークと思しきピークを右に巻き、コルに出る。4 ピッチ目は3mほどのギャップを嫌って途中左に逃げ、斜面を登ってリッジに戻る。残置の縄FIXと、ハーケンがギャップ手前の足元に一枚(アングル)、ギャップの途中に一枚。5 ピッチ目雪面のバンドを右にトラバースしたあと

そのまま岩稜直下の雪面に出る。

6 ピッチ目弱点を突きながら岩稜伝いに登ると、伊藤先生命名の「ゴジラの背」岩稜が目飛び込んできた。7 ピッチ目は最初岩雪草付のいやらしい斜面を登ってからゴジラの背を向こう側に乗越して雪とハイマツの斜面を行く。8 ピッチ目は細いリッジが途中で少しだけ広くなる。この辺りは見通しがよく、声もよく通るのでさくさく登る。終了点は岩角から取れた。

9 ピッチ目、再び細くなったリッジを恐る恐る通過。なぜか腐りかけのハリガネFIXがある。何に使ったのだろう……。10、11 ピッチ目、かなり傾斜が落ちてきたし、高度計の数値から見ても既に獅子頭の基部にいると思われる。ゆるい雪面を登り、ついに獅子頭に到着した。

この時点で 13:40 時である。天候も悪化してきているし、時間も無いので下山することにする。伊藤先生に下降路のアドヴァイスを受けながら早足に下り、16:27 時に早月小屋に着き、テントを張る。じきに風雨となる。

11月27日 雨

起床(5:15)―早月小屋発(7:00)―奥の小平(9:45)―馬場島(10:23)＝近江舞子＝京都

風は朝まで吹き続け、雨も止まない。しかし幸い出発するころには両方ともゆるくなった。正月のことを考えながら下っていく。途中でアイゼンをはずし、ひたすら長い下りを行く。今月早月尾根を下るのは2回目だ。要所要所で記憶をよみがえらせながら、また伊藤先生のアドヴァイスを受けながら下る。約3時間半で馬場島へ下りきった。